

成 果 報 告

この報告書は、静岡県から「平成 28 年度大学間等連携推進事業費補助金」を受けて公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアムが実施した「平成 28 年度ゼミ学生地域貢献推進事業」の成果報告書として取りまとめたものです。添付資料のうち、頁数の多いものは冊子に含めず、当コンソーシアムで保管しています。

なお、「ゼミ学生地域貢献推進事業」の募集要領・指定課題一覧等は当コンソーシアムのウェブサイトにてご覧いただけます。

URL: <http://www.fujinokuni-consortium.or.jp/>

浜松市天竜区佐久間町における地域づくりの方策の研究 ——佐久間地区を中心——

指導教員：静岡文化芸術大学 文化政策学部 文化政策学科 准教授：船戸修一
参加学生：千葉大樹（本学科2年生）、鈴木晴香（本学科1年生）

「農村社会学」を専攻する船戸ゼミでは、昨年度の浜松市天竜区佐久間町山香地区と城西地区の調査に引き続き、ゼミ生（2年生1人、1年生1人）とともに、2016年5月から2016年12月まで（8・9月は除く）週1回の頻度（合計14回）で、同町の佐久間地区の集落に赴き、自治会長をはじめ班や組の代表者などから現地での生活や暮らしの現状についての聞き取り調査を行った。また、この調査は、地元の祭りやイベントにも、教員と学生たちで参加するという「参与観察」に基づいたフィールドワークでもあった。さらに2016年12月には、佐久間町佐久間地区の全世帯（約580世帯）を対象にしたアンケートを配布し、地域住民の意識や日常生活の状況についての調査を行った（アンケート結果については現在集計中）。

これまで佐久間町では、佐久間ダムの建設（1953年着工、

1956年竣工）・久根鉱山（1902年操業開始、1970年

閉山）・大規模林業など

「近代資本集中」型の地域開発を進めてきた。

このような外部資本型の開発を導入してきたため、人口の急激な増加とその後の大型資本による開発撤退や一次産業の不振による大幅な人口減少を経験してきた（1955年は26,671人、2016年10月1日現在で3,953人）。昨年、

調査した同町の山香地区では、2006年3月に山

香小学校が閉校し、この地域から小中学校が消滅した。また、同様に調査した城西地区においても、2017年3月に城西小学校も閉校する予定である。このように同町では地元小学校が消滅することによって、一層の人口減少が予想され、過疎問題が深刻化する可能性が高い。

しかし一方で、佐久間地区では、実家から転出した息子や娘たち——「他出子」と言う——が頻繁に実家に戻り、場合によっては、近隣住民の生活をサポートしていることが聞き取り調査から分かった。そのため、仮に独居世帯であっても、この他出子からのサポートを受け続けることができれば、集落での生活は維持され、すぐに集落は消滅しない。よって、今後は、このような他出子が頻繁に出身集落に戻り、家族だけでなく、集落の共同作業や祭りに積極的に参加することによって集落の維持につなげることが求められる。

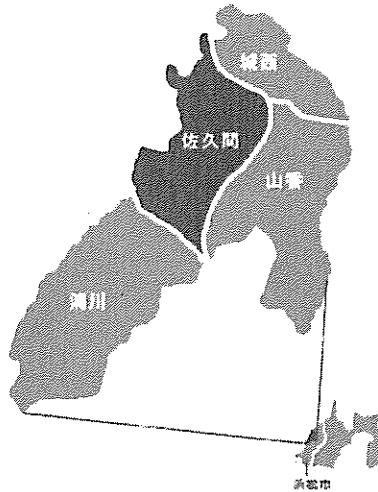


図1 浜松市 天竜区 佐久間町 佐久間地区の位置

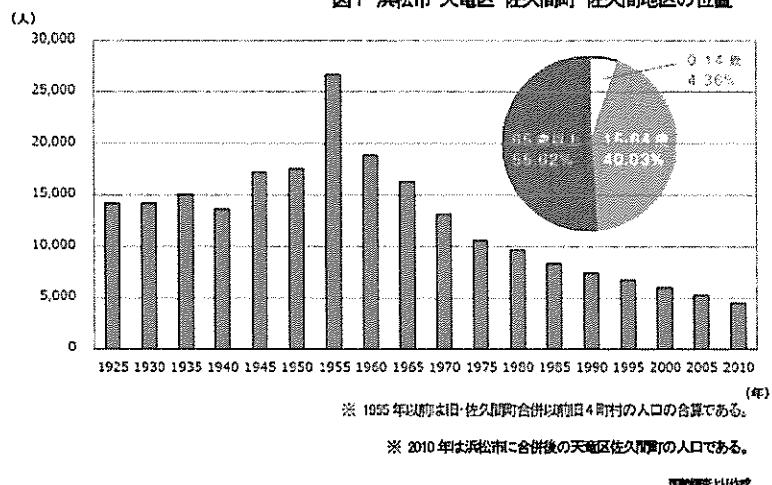


図2 佐久間町の人口推移と人口構成(2016年10月1日時点)

昨今、65歳以上の人口が半分以上を占める集落を「限界集落」と呼び、その消滅可能性だけが強調される。しかし、集落の存続可能性は、年齢別の人口構成(高齢化率)ではなく、集落を越えた家族機能がどれだけ残っているかにかかっていることに気づかなければならない。

そこで、佐久間地区における他出子が、①どれくらいおり、②どこに居住し、③どれくらいの頻度で実家・集落に通うのかについて調査した(他出子の実家・集落との関わり方についてのアンケート調査結果は現在集計中)。現在、佐久間地区では、自治会が6つ(峯・羽ヶ庄・下平・佐久間・中部・半場)ある。本報告書では、紙幅の限られているため、上記6つの自治会のうち「佐久間自治会」(1班~18班)のみを取りあげる。

まず、年齢層別に見た佐久間自治会の人口と他出子数である。現在の人口は、294人である。他出子は、236人いる。この中でも、40~50代がもっとも多い。

次に、居住地別に見た、他出子の数である。約5割の転出した子どもが県内・県外含め近隣に住んでいる。ということは、車で約1時間半~2時間以内の距離に居住している他出子が半分以上いる。

さらに、実家・集落に通う頻度別に見た、他出子の数である。全く実家・集落に通わない他出子は、28人(12%)いるが、それ以外の他出子のうち88人(81%)は年1回通っている。特に1~5回が最も多く、89人(38%)いる。

このように佐久間地区において人口は減少しているものの、集落を越えた他出子による家族へのサポートがあることが分かった。このような家族機能が残っていれば、集落はそう簡単に消滅せず、むしろ、その維持可能性が見えてくる。

以上のような調査を踏まえ、佐久間地区の住民を対象に2017年3月3日(金)19時~21時、佐久間歴史と民話の郷会館(小ホール)において現地報告会を開催する。この報告会では、これまでの調査結果に基づき、佐久間地区の現状を分析するだけでなく、課題解決策の提案や今後の地域づくりの方向性についても発表する。このように調査によって得られた知見を地元にフィードバッ

クすることを試みるとところにも、ゼミ活動の特徴がある。ゼミ生の中には、将来、中山間地域を抱える地域において公務員就職を希望している学生もあり、こうしたゼミ活動は学生のキャリアデザインに向けた実践的教育手法としても有意義であると思われる。船戸ゼミは「農村社会学」という専門性や調査手法を活かしつつ、調査結果を地域住民や行政(浜松市)に還元するという「大学・学生連携型の地域づくり」

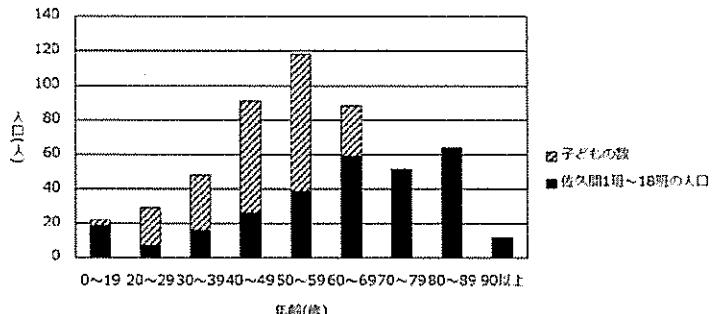
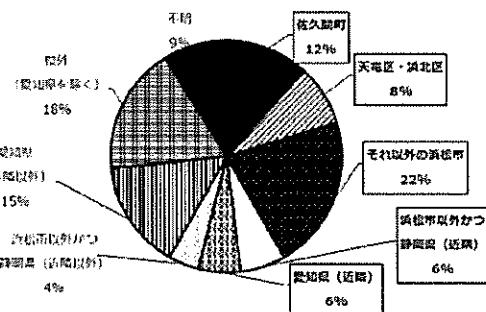


表1 年齢層別に見た佐久間自治会の人口と他出子数



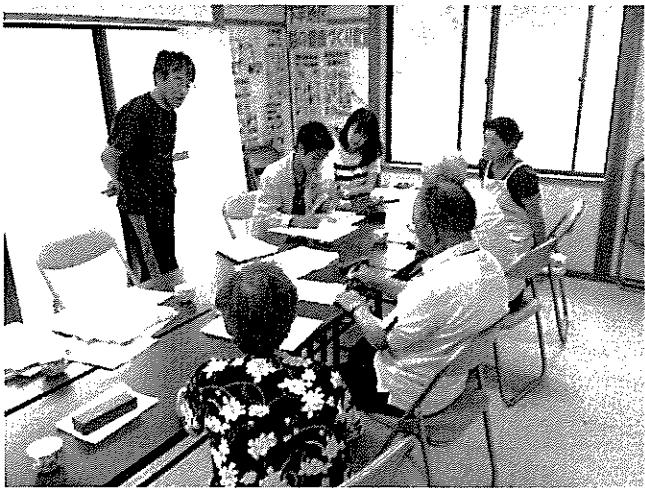
*浜松市→浜松市、森町、塩田町、袋井市、掛川市

*愛知県→栗山町、豊根村、田原市、設楽町、豊橋市、豊川市、新城市

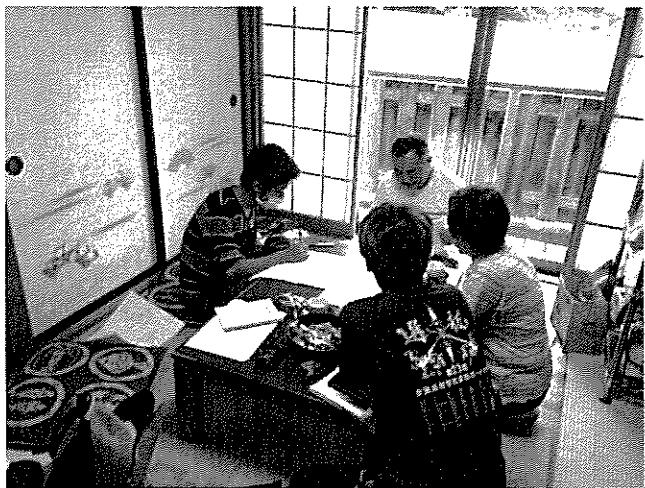
表2 居住地別に見た佐久間自治会の他出子

頻度(回)	子どもの数(人)	割合(%)
年0回	28人	12%
年1~5回	89人	38%
年6~10回	23人	10%
年11~15回	39人	17%
年16~20回	0人	0%
年21回以上	37人	16%
不明	20人	8%

表3 実家・集落通う頻度別に見た佐久間自治会の他出子



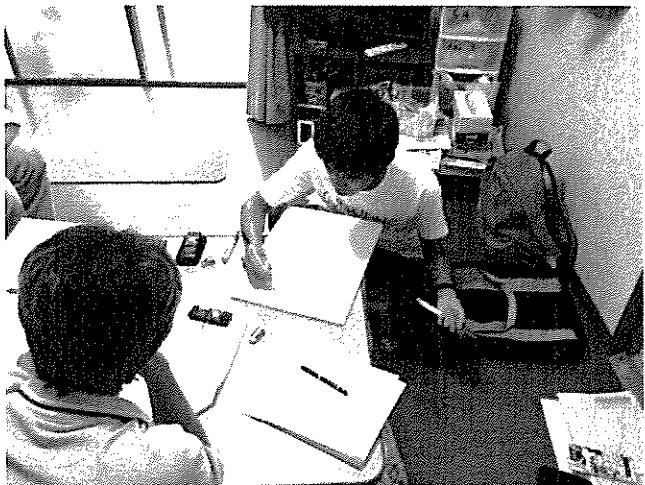
① 松戸ゼミによる佐久間町佐久間地区の調査の様子(2016年6月12日)



② 松戸ゼミによる佐久間町佐久間地区の調査の様子(2016年6月19日)



③ 松戸ゼミによる佐久間町佐久間地区の調査の様子(2016年7月3日)



④ 松戸ゼミによる佐久間町佐久間地区の調査の様子(2016年7月17日)



⑤ 松戸ゼミによる佐久間町佐久間地区の調査の様子(2016年7月24日)



⑥ 松戸ゼミによる佐久間町佐久間地区の調査の様子(2016年12月18日)

佐久間の暮らしの現状と今後の中山間地域づくり

静岡文化芸術大学 文化政策学部 文化政策学科 舟戸ゼミ

浜松市天竜区佐久間町 佐久間地区 調査報告会

日本の中山間地域は、国土面積の7割を占め、そのほとんどが森林や山で構成されています。この森林は、水源をかん養したり、水を濾過して、下流域の都市部の人たちの飲料水を確保してくれています。さらに、山の棚田は、美しい農村景観を形成することによって、訪れる都市部の人たちに安らぎや癒しを提供してくれます。このように中山間地域は、都市部に住む人たちにとって多大な恩恵をもたらしています。

しかし、昨今、このような中山間地域が、若者流出による地域の担い手不足から地域の行事や祭りが縮小し、耕作が放棄される農地も増えるなど、深刻な問題を抱えています。さらに、急激な人口減少により、将来的に維持が困難になると予想される集落も見られます。この問題は、全市面積の約7割を占める浜松の中山間地域（天竜区と北区の一部）も例外ではありません。

そこで、中山間地域について調査&研究に取り組む、文化政策学部 文化政策学科 舟戸ゼミでは、「中山間地域における集落を一戸たりとも無くしてはならない」という思いのもと、浜松の中山間地域の一つである佐久間町佐久間地区において、昨年（2017年）5月から12月まで調査を実施してきました。

具体的には、佐久間地区の自治会の代表の方だけでなく、自治会の下部組織である「班」の代表の方への聞き取りも行い、集落の現代や課題について調査を行いました。また、佐久間地区の全世帯（約580世帯）にアンケートを配布し、そこにお住まいの方々の意識やお考えについても調査を実施しました。このような調査の結果分析を踏まえ、浜松の中山間地域に集落を残していくための方策や課題解決策を舟戸ゼミで構想し、それを3月3日（金）に佐久間地区において開催する調査報告会において発表します。

具体的には、①「他出子（実家から転出した子ども）」と実家・集落とのかかわりの実態 ②佐久間町外から転入する「移住者」をめぐる住民意識 ③人口減少から増加する「空き家」の実態とそれをめぐる住民意識 ④佐久間での暮らしや生活に対する住民意識 という4つのテーマから、佐久間地区において集落を維持するための策や今後の佐久間地区の地域づくりについて発表します。

発表会場は、本学から距離がありますが、ご興味のある方は、是非、ご来場ください。

【日時と場所】 平成29年3月3日（金） 午後7時～午後9時

佐久間歴史と民話の郷会館 小ホール（浜松市天竜区佐久間町佐久間429-1）

【報告内容】

- ①はじめに：佐久間町佐久間地区の調査概要 ……………… 文化政策学科准教授 舟戸修一
- ②「他出子」と実家・集落とのかかわりと佐久間地区の集落維持に向けて… 文化政策学科2年 千葉大樹
- ③移住者をめぐる意識と定住促進のための課題 ……………… 文化政策学科1年 鈴木晴香
- ④空き家をめぐる意識とその利活用に向けて ……………… 文化政策学科准教授 舟戸修一
- ⑤佐久間地区における住民意識と地域の課題 ……………… 文化政策学科1年 鈴木晴香
- ⑥おわりに：調査報告のまとめと今後の佐久間地区の地域づくり ……………… 文化政策学科准教授 舟戸修一

【料金】 無料

【お問い合わせ】

参加を希望する方は、以下に連絡をし、「調査報告会への参加申込み」をしてください。

静岡文化芸術大学 地域連携室 Tel : 053-457-6105 / Mail : chiiki@suac.ac.jp

西浦地区住民との協働による地域課題の分析や活性化策の提言

静岡県立大学経営情報学部 金川ゼミ

指導教員：金川幸司

参加学生：山本啓太、高村有香子、向坂麻理菜

谷村和樹、名倉浩平、影島彪利

杉山奈津希、斎藤真理、土肥潤也

長谷川万由子、山本裕也

1. 要約

近年、沼津市南部の西浦地区では若者の転出やそれに伴う人口流出・高齢化等の問題が発生しており、その対策が喫緊の課題となっている。そこで、西浦地区の住民たちと協働で地域課題の分析、活性化策の提言を行うことが本研究での主旨である。

はじめに、本研究では沼津市役所で沼津市西浦地区の担当職員と西浦地区を中心となって活動している方々を交え、西浦地区の現状・概要について調査をした。その後、GISによる統計調査、文献調査等の事前調査を行った後、西浦地区でのフィールドワークを実施した。フィールドワークでは、西浦地区でのフィールド調査、農協・自治会長・消防団等に対するヒアリング調査、一般住民参加のワークショップを行った。これらの、研究活動を踏まえ西浦地区における活性化策の提言を行う。

2. 研究の目的

西浦地区では、人口減少・高齢化・若者の転出等、日本の地方各所で見られるものと同様の現象が近年発生している。しかし、本研究はマクロの統計指標のみでの視点での調査・研究ではなく、それらの分析方法では軽視される傾向のある地域住民の声を反映した地域住民と協働で行う調査・研究を志向している。そこで、学生ならではの視点で調査、研究を行い、西浦地区の活性化につながる新たな施策の提案を本研究では目的としている。

3. 研究の内容

(1) 研究手法

西浦地区における研究調査は事前調査として市役所担当職員へのヒアリング、GISを用いた地域分析を行った。フィールドワークでは、自治会長、農協、消防団、民生委員等西浦地区を代表する人たちへのヒアリング、地域のフィールド調査（町並み調査に加えて、船による海上からの視察）、住民参加のワークショップを行った。

図表1：船による海上からの視察



(2) 西浦地区について

西浦地区では、高齢化、若者の流出が大きな課題となっており、活性化策の提言を行う前に、西浦地区における現状を明確にすることが必要である。

①現状

全国の高齢化率 : 26.8%

沼津全体の高齢化率 : 27%

西浦地区の高齢化率 : 38%

西浦における農業者率 : 52%

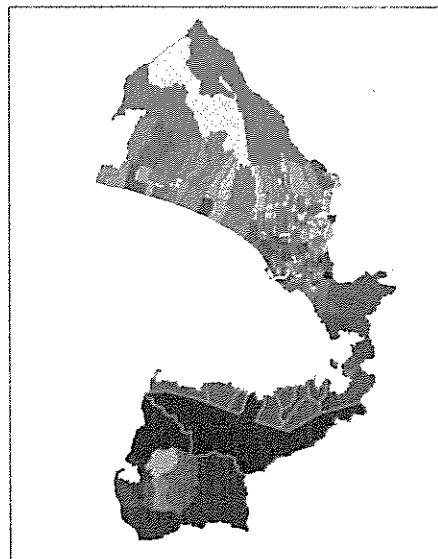
出典 : E-stat、沼津市役所ホームページ

沼津市全体の高齢化率は27%と全国平均とほぼ同等であるが、西浦地区における高齢化率の平均は38%と沼津市・全国平均から大きく乖離している。沼津市北部では、工業・商業が発達しているが、西浦地区がある南部では、農業者率からもわかるように農家（主にみかん農家）が多く、その割合は52%と就業者の2人に1人は農業を営んでいる。

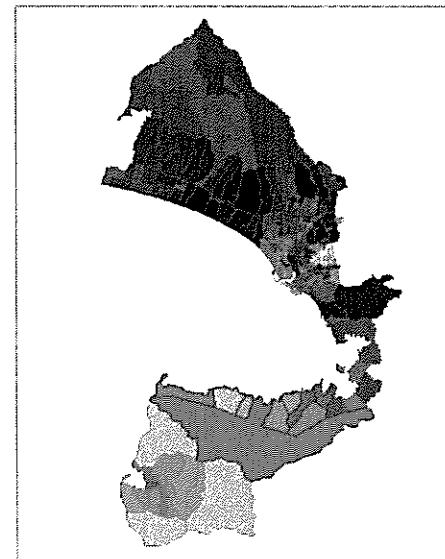
また、西浦地区は自然公園法の特別地域に指定されており、工作物の新築・改装、樹木の伐採、施設の塗色色彩の変更をするためには申請・許可が必要であり、新たに企業の誘致や、既存建築物の改修等が行きづらい状況にある。

②GIS の分析結果

図表 2 : 沼津市の地区ごとの高齢化率



図表 3 : 沼津市の地区ごとの人口数



出典 : E-stat、沼津市役所ホームページより作成

西浦地区の課題を分析するための、手法として GIS を用いる。GIS を用いて小地区データを可視化することで、地域における課題が視覚的により分かり易く整理される。

左記の図表 2 では、沼津市の高齢化率における最小値から最大値までの間を 20 分割して色をわけ、色が濃いほど高齢化率が高いことを示している。青色の枠で囲まれている地域が西浦地区である。西浦地区では高齢化率が低い地域で 32%、高齢化率が高い地域では 65% であり、沼津市の中でも非常に高齢化が進んでいる。

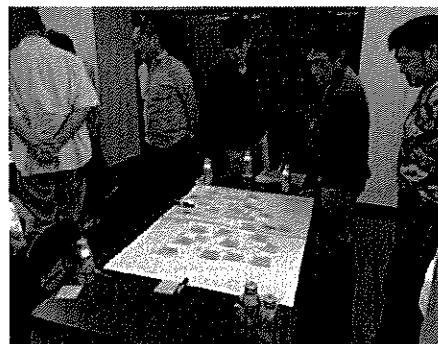
次に、左記の図表 3 は図表 2 と同様に沼津市の小地区人口データを可視化している。色が濃いほど人口が多く、逆に色が薄いほど人口が少ない。西浦地区は赤い線で囲まれている地域であり、沼津市北部・中部と比較して人口が少ないことがわかる。西浦地区の人口は一番少ない地区では 82 人、多い地域では 372 人である。

4. 研究の成果

(1) 当初の計画及び実際の内容

概ね予定通りに実施することが出来た。変更した予定箇所はハザードマップに関する提言である。ハザードマップは、すでに地域の小学生と行政の連携による危険個所マップが作成済みであったため、これに関する研究活動を取りやめた。また、本研究では空き家に関する施策に重点を置いたためソーシャルビジネス等の主体に関する議論は省略した。

図表 4 :住民参加のワークショップで班に分かれて議論



(2) 本研究活動の成果と課題

ヒアリングや町並み調査などのフィールドワーク、さらには、住民参加のワークショップを開き、住民の声を聞くことでそこに住む人たちの視点から、研究の提言を考察することが出来た。

①ワークショップ

ワークショップでは、住民は西浦地区の自然環境や住む人々の人柄に満足、好感を示しているものの、沼津市街地へのアクセスの悪さ、みかん農家ならではの夏季収入の不安定さなどを問題視する声があった。

図表 5 :現地の町並み調査の様子



②ヒアリングの結果

西浦地区で、主要な農作物であるみかんの農家も現在は跡継ぎ不足や農家の人たちの高齢化で衰退の一途を辿っており、さらには、新規就農者への支援や高齢者の農家の人たちが労働しやすい環境が整っていないことがヒアリングの結果分かった。

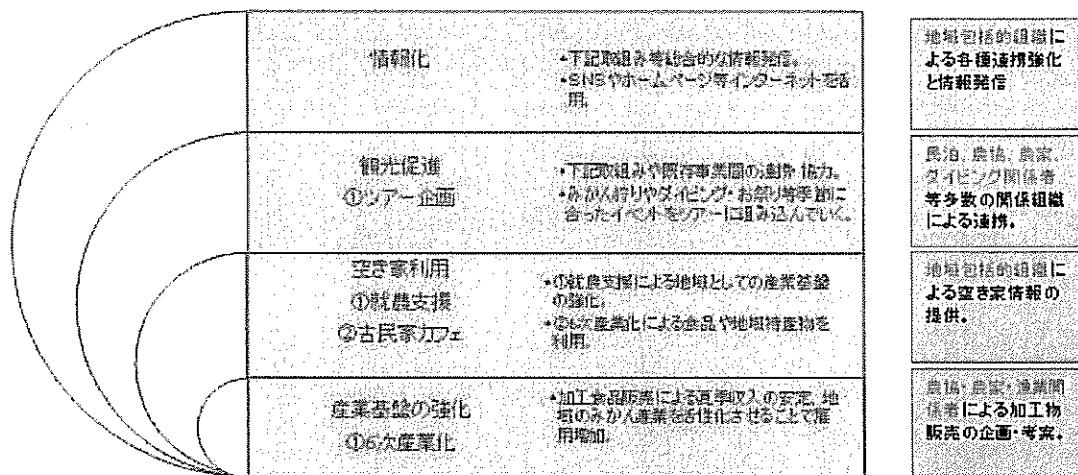
③町並み調査

町並み調査の結果、西浦地区には空き家が散在していること、地域の特産物のみかんを利用したみかん狩り体験等の取組みが行われているということがわかった。

5. 地域への提言

今回の調査結果から得られた成果から西浦地区への提言を以下の4つに集約した。また、下記の図表6は上位にあるものほど包括的な活動であることを示している。

図表 6 提言の概要図



(1)情報化

ホームページやSNSは存在するが分かりづらさや機能していない部分が目立つ。そのため、以下の提言をより促進させるためにも、インターネット・SNSをより活用して発信力を高める。

(2)観光促進

みかん狩り等の活動と地域の民泊を繋げてツアーを企画する。みかん狩りや西浦地区御瀬崎のダイビングスポット等、それぞれ西浦地区内の単独の観光促進への取組みは見られるが、西浦地区での総合的な観光促進は未だ行われていないので、みかん狩りをした後に、後述の空き家カフェで食事ができる、あるいは、そのまま民泊で宿泊できる、そのようなツアーを企画して西浦地区的総合的な活性化を図る。

(3)空き家利用

就農支援の一環として空き家を提供する。西浦地区は前述のとおり自然公園法の特別地域であるため、新たに建造物を建てるためにも手続きが必要である。そのため、移転者を呼び込みづらい状況にある。そこで、地域に点在する歴史的な古民家の空き家を利用することにより、町並み・自然を維持したまま移転者の増加、さらには新規就農者への支援を行うことが出来る。

レトロな感覚の空き家を利用してカフェをつくる。空き家を利用しカフェをつくることで、後述の6次産業化加工物やみかん狩り、ダイビングスポット等との連携を図る。

(4)産業基盤の強化

西浦地区の主要産業であるみかんの6次産業化を図り、加工物販売によるみかん農家の夏季収入の安定・雇用増加による活性化を図る。具体的には、加工物でも冬に売れるみかんとは対照にアイスやジエラート、ジュースなど夏季に売れる加工品へみかんを転化し、季節を通してみかん農家の収入の安定化、及び雇用の促進を図る。

他地域の先進事例としては、餌にフルーツを使うことで養殖魚の臭みを消すという、フルーツ魚というものもあり、検討してみてはどうだろうか。このような取り組みによって西浦地区的漁業と農業の連携・共栄を図る。

6. 地域からの評価

本調査結果を地域の方に知らせた後に評価を得る予定である。現時点では、新聞で本研究活動が紹介され社会的関心を呼んだ。

平成29年1月26日

三島市の国際観光立市の高揚と外国人受け入れに関する研究

日本大学国際関係学部福井ゼミナール

指導教員：教授 福井 千鶴

参加学生：来栖翼、水谷優美菜、佐野匠

1. 要約

東京オリンピック、韋山反射炉と富士山の世界遺産に登録されたことに伴う、三島市におけるインバウンド外国人観光客の増加対策と受け入れ体制の確立を図るため、①外国人観光客向けに必要な内容と情報の調査 ②外国人向け観光資源・魅力の発掘及び開発③外国人受け入れ対策と「おもてなし」体制の確立 ④外国人観光客向け案内資料の充実（サンプルの作製）を目的とし、チームごとにグループワークを行った。

2. 研究の目的

今まで三島は外国人観光客にとって箱根や富士観光の通過地点に過ぎなかつたが、宿泊の為に三島に立ち寄った時、宿泊施設からは1歩も外出せず、コンビニで買い求めた食べ物をロビーで食していた。夜の数時間三島の街を散策してもらえるような情報を発信すれば、リピート客の期待ができる。また受益者側(留学生)の目線で新しい魅力の再発見が出来れば、その魅力を増幅させ、新たな観光客の集客につながり、三島市の国際観光立市の高揚に資することを目的とする。

3. 研究の内容

研究課題の実施方法について、研究目的を達成するために種々検討を行い次の事業を実施した。

3. 1 外国人観光客の為のナイトマップ（15店舗を掲載）を作成する

三島市の商店街の活性化を図り、外国人が歩きやすい街にするために、商店街の方々の協力を得るための、「三島商工会議所青年部」の方々と協力し、夜外国人を受け入れてくれるお店をピックアップし、一緒に取材をした

① お店でのアンケート

一番人気のメニュー・お勧めしたいメニュー

お店の雰囲気・お店のテーマ・価格帯・定休日・営業時間

お店の所在地 など

② マップのレイアウト作成。

地図を書きお店の説明と写真を組み合わせ

マップを完成させる

留意点：外国人観光客を相手にしているので言語問題や国民性などについても理解を促した。

③ お店側の希望も記載できるよう取材した。



ナイトマップ（中国語版）

3. 2 12店舗の手差しマップを作成

- ① 外国人観光客は、英語圏・中国語圏の方が特に多く、訪れて観光や買い物をする際、言語によるミスマッチが発生し商品やサービス提供の前にしっかりととした買い手と売り手の意思疎通が出来ていない問題が挙げられる。
- ② そこで外国人観光客や多く訪れそうな駅周辺、及び三島大社、広小路のお店に焦点を当て手差しの言語カードを作成することによって観光客、お店側との円滑なやり取りができる、結果として既存のお店に対する購買向上と新たに外国人をターゲットとした商品提供が出来、三島市としての活性にも繋がると考えた。

③ 製作日程

6月、第一回協力店舗の選定

7月、アンケートを取る質問欄がある程度想定して考察

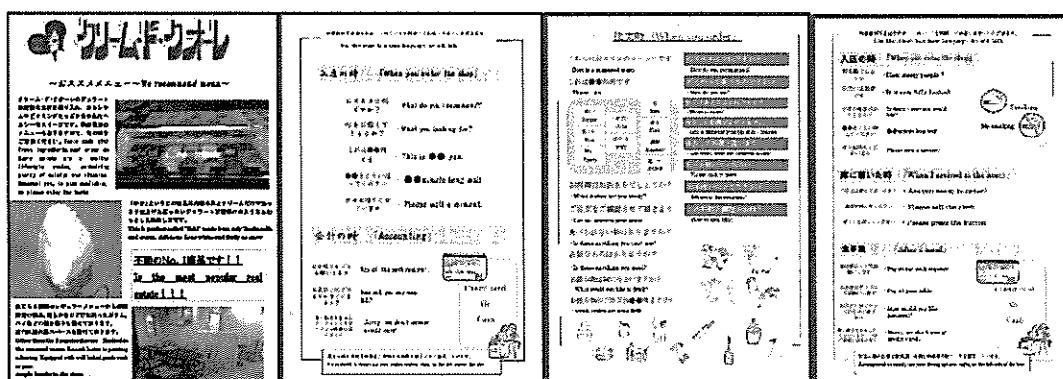
8月、直接お店にアポを取り、アンケートやその他要望を聞く

9月、多言語カードの主なレイアウトを作製

10～11月、要望を元にWordで作製・及び再度店舗に再確認

12月、完成した資料を元に完成形にするため印刷

1月、店舗に直接渡す（ワンクール終了予定）



手差しカード（クリーム・ド・コオーレ）

手差しカード（風土本店）

3. 3 多言語観光パンフレット（ポルトガル語・中国語・韓国語）

- ① ポルトガル語パンフレットのテーマは、幅広い観光客を取り入れるために日本に滞在している南米人に加えて、南米からの観光客に向けたパンフレットを作成した。
- ② ポルトガル語チームは翻訳班とレイアウト班に分けて、翻訳班では収集した情報を日本語からポルトガル語に翻訳し、友人のブラジル人と相談をしながらより正確な文書に翻訳しました。レイアウト班では、様々なレイアウトを調べ、南米人が魅力を感じるようなレイアウトづくりを行った。



ポルトガル語のパンフレット

- ③ 韓国語チームは、日本文化を感じられるような観光地を選んだ。

韓国人留学生と一緒に文を考え、韓国人にわかりやすい言い回しにした。
韓国語に訳すときの言い回しなどの違いを考えなければいけなかつた点が大変だつた。



韓国語のパンフレット

- ④ 中国語チームは、中国から日本への観光客が多いので、三島に宿泊目的ではなく観光でもらえるような、手に取って見やすい、観光スポットや飲食店を乗せすぎない、見やすさ、選びやすさにつながるパンフレットを作製した。



中国語のパンフレット

4. 研究の成果

- (1) 当初の計画 ナイトマップ、手差しカード、ポルトガル語のパンフレット・中国語のパンフレット・韓国語のパンフレットを製作した。
- (2) 実際の内容、試作に手間取り手差しカードは各店舗に配布するのみでその後の調査はまだできていない。
多言語のパンフレットも印刷の刷り上がりが1月末までずれ込み、伊東市役所に贈呈した。
ナイトマップもホテルにおいてもらうに留まった。
- (3) 成果と課題
今後どのように活用されるのかは後日アンケートを取ることを考えている。
アンケートを集計し、課題が見つかれば修正していく。
- (4) 今後の改善点や対策
アンケートの集計の結果を改善点に反映させる。

5. 地域への提言

商店街の活性化と目に見える（商店主の顔が見える）店舗をアピールするため、ナイトマップや手差

しカードをお願いしに店舗を回ったが、外国人観光客受け入れに対しては消極的な店舗・飲食店が多く見受けられた。文化の違い、コミュニケーションの取りづらさ＝英語が話せないコンプレックスなど日常生活の中ではあまり体験していなかったことへの不安感であろうか。しかし今後を見据えると三島市の活性化には商店街や飲食店の活性化が不可欠であり、人々が行きかう街、賑わいを取り戻すためにも、外国人観光客を積極的に受け入れるべきである。町全体が異文化を理解し、誰とでも友達になれるような街づくりが必要である。町全体が外国人観光客を歓迎していることを、観光客自身に感じ取ってもらえる町づくりが必要である。

また、一度日本を訪れた外国人観光客は新たな「驚き」を期待して、一度経験した日本の魅力（観光資源）の中から、レベルアップをした観光資源に巡りあうために、2度3度と日本を訪れる。そうした魅力の発掘とブラッシュアップが必要とされている。そのためにも、三島で暮らしている人々が三島の魅力を再認識する必要がある。本人が魅力を感じていることは他人にも伝わるものである。

6. 地域からの評価

これからナイトマップ、手差しカード、ポルトガル語のパンフレット・中国語のパンフレット・韓国語のパンフレットを手に取ってもらい、活用してもらってから評価もみえてくる。

以上

富士宮市 県外に向けたシティプロモーションに関する研究

静岡県立大学国際関係学部宮崎晋生研究室 指導教員：講師 宮崎晋生

参加学生：国際関係学部国際関係学科 4年 木下日加里、小林明日香

同3年 秋野未有、野田侑希、平野彩夏、町田香菜

1. 要約：若年層の移住促進のために何をプロモーションすべきか

この研究の主眼は、富士宮市における移住促進のためのプロモーションの基本的方針を学生の視点から提案することである。2016年9月～年末にかけ、聞き取り調査、市役所におけるプロモーション戦略会議への出席、および高校生アンケート調査を通じて分析した。

若年層を漫然と「若者」と扱うのではなく、どのような属性の何を目的としている「若者」とするのかフォーカスを当て、そこにどのような共感するストーリーを伝えるか、提案するものである。つまり、創造的に生きたい「若者」に向け、自分の信念・スキル・技術をもって富士宮で活躍する人々をアピールすることを提案したい。

2. 研究の目的：富士宮市への移住促進のためのプロモーション

富士宮市は地方都市としてはいち早く「B級グルメ」焼きそばを用いたプロモーションに成功してきた。これは富士市、沼津市や山梨県身延町、南部町など近隣の他自治体と比べて突出した成果をあげている。他方で富士宮市は(大学)進学・就職を理由とした20代前半の人口減少に歯止めがかからず、2000年代後半以降では20代前半の若年層流出者の帰還が減少傾向にある。加えて多くの地方都市の例にもれず、高齢化にも歯止めがかからない。市の人口構成は20代前半に人口の「谷」がみられるが、他方で65歳～70歳の「団塊世代」の「山」が突出、将来の現役勤労世代の減少と(リタイアした)高齢者増加が富士宮市の課題である。当研究では若年層から現役世代にかけての移住者を増やすためのプロモーションをどのように行うかを提案するものである。

3. 研究の内容：ポスト「やきそば」の富士宮プロモーション

都市とイノベーションの関係を研究するリチャード・フロリダによれば、都市の競争力はクリエイターや技術者・科学者、文化芸術関係など知識の創造にかかわる仕事を行う人々（クリエイティブ・クラス）の集積に懸かっている。その条件として3つのT、つまり Technology(技術)、Talent(才能)、および Tolerance(多様性の許容)が求められている（フロリダ[2007]）。経済地理学者アナリー・サクセニアンは都市における産業集積に注目、サンフランシスコベイエリア・シリコンバレーでその地域内における競争と協調の同時並行的進行が企業間関係を作り上げてきたパターンにより発展したことを明らかにした（サクセニアン[2008]）。マイケル・ピオリ&チャールズ・セーブルの研究では、「第三イタリア」エミリア=ロマーニャ州を事例としてポスト大量生産時代の地域経済でカギを握るのは専門知識を持った各企業の連携、つまり「柔軟な専門化」であると主張している（ピオリ=セーブル[1993]）。忽那・山田によれば地域創生にとってカギを握るのは新しい結合をリードする「企業家精神」であり、地域の名産品を生かした「プラットフォーム」、人材育成への地域中小企業の関与等民間企業の創意工夫を生かした地域創生ができるかどうかが鍵であるとした（忽那・山田[2016]）。

こうしたこれまでの研究を踏まえ富士宮市の歴史をひもとくと、移民により繁栄してきたシリコンバレー地域に近い側面がみられる。『富士宮市史』によれば第二次大戦後期より農業・酪農において国内他地域から富士山麓の広大な高原へ移住者が相次いだ。こうした移住者たちにより開墾・開拓が進められ、戦後食糧不足解消に貢献された。その後、今日に至るまで地域内での競争と協調により、「朝霧高原牛乳」から「富士宮にじます」「萬幻豚」に至る各農家・酪農家による品質改善や品種改良による創意工夫、「ビオファームまつき」等「第六次産業」のパイオニア的事業者が拠点を置き、さらには「まかないの牧場」「ミルクランド」など、食と観光を繋ぐ一部の牧場や農場は富士宮の一大観光資源が生まれた。

さらに移住の要因として近年は「官能都市」がキーワードとして注目されている（島原万丈・Homes技研[2016]）。島原らの言う「官能都市」とは単なる「住みやすさ」「住みたい」という指標ではわからない、人間の五感に訴える「身体性」と人々のつながりを実感できる「関係性」がある都市である。インフラ整備や補助金といった行政による努力だけではない、上記のような「官能性」をアピールす

る視点においても富士宮市はプロモーションすべき内容をここで再検討する必要があるだろう。

4. 研究の成果

1) 当初の計画

当初の計画としては、9月～12月にかけて市役所のご協力のもと、市内の事業者ならびに一般市民への聞き取り調査を行い、問題点の抽出を行うこととした。また、前述の通り20代前半の流出が問題とされていることから、市内高校生へのアンケート調査も進める計画を立てた。

そこで我々は富士宮市のシティプロモーションを考える上で、まず富士宮の誇れるものは何か、さらにプロモーションのターゲットは誰か、この2点に焦点を絞ることとした。

2) 実際の内容

まず、これまで富士宮市のプロモーションに尽力されてこられた富士宮焼きそば学会会長渡辺英彦氏へのヒアリングを行った。渡辺氏によれば、「もともと富士宮焼きそばは『ご当地』B級グルメである。じつは『ご当地』を前面に出したかった。だがいまは『ご当地』が外れてしまって『B級』のイメージが先行してしまった。B級グルメのBはブランドのBだ。」とのことであった。メディアで取り上げられていくうちに本来の意図が曲解され、意味がすり替わったことを問題点として指摘されている。また、「地域おこし、地域ブランドには既にその地域にあるものを使うこと、つまり眠っているもの、あるけど目立ってないものに光をあてるなどを主眼に置きたい」という。「富士宮＝やきそば」で知名度を上げることに一定の成功を収めた現在の問題点として、地域の様々な事業者（農家・酪農家、他食品メーカー・造り酒屋、工業・商業など）による多業種連携がとれていないと述べていた。

また駅前の商店街にてとりまとめ役を務めてこられた文具店店主への聞き取りでは、大型店との競合による個別店舗の衰退を危惧していること、しかし個店側も市の再開発頼みの側面があることを懸念材料として挙げている。また観光についても団体ツアーや個人客に期待できる側面があり、その文具店では大手商業施設にはできないオリジナル商品開発を行っているという。車社会による商店街の衰退、後継者問題も商店街共通の懸念材料として挙げている。

市内中小企業の広告制作・店舗デザイン制作を担う広告代理店主への聞き取りでは以下の通りであった。「Uターン比率が低いのは『富士宮にやりたい仕事がない』と思われているからである。だが、リクナビやマイナビなど大手就職情報サイトへの掲載はお金がかかるため中小企業は掲載しないため若者には富士宮に仕事はないイメージをもたれている。問題は、大学などで市外に出て行った人にどのように情報を伝えるかであろう。」とプロモーションでの問題点を指摘した。他方、商店街に関しては「大型ショッピングセンターのせいにするのではなくそれに対応していくなければならない。行政が商店街のみに肩入れするのはおかしいのではないか？」と、大型ショッピングセンターと必ずしも対立するだけではない立場を示し、各商店の問題や行政の在り方について疑問を呈している。「富士宮らしさや『身の丈』を知ったほうがいい。できることできないこと強み弱みの認識が必要だろう。富士宮はバランスがいい、何でもある何でもできる。富士山の山頂は富士宮なのだからもっと富士山で押していくべきだ。」という結論であった。

市街地から離れた集落への聞き取り調査も行った。東京都郊外より移住してきた柚野地区の有機野菜農園「ゆのさや農園」代表への調査を行った。もともと「6次産業」に携わっていたが、社内の事情や規模の経済性を考えると独立して農産物をネットで直接取引するほうが良いことがわかり、独立して柚野地区で有機野菜農場を立ち上げた。柚野地区は子供が減少しないどころか、現在は移住希望者が空き家待ちしている状態である。理由としては、柚野は本気でこの地で仕事をしようとするニューカマーに対してオープンな土地であり、支援しあえる関係づくりができていることをあげている。ただ、高齢者の増加は例にもれず、後継者問題は存在するが所有する農地を現役世代の移住者に委託し、休耕地荒廃問題は解消されている。柚野地区にはほかにも関東地域や関西大都市圏から移住してきた人が多く、農業の他にも陶芸家や大工など多様なスキルを持った人が集まっている。大々的なプロモーションをせずとも伝わる「本物志向」を目指している、とのことであった。

そのほか聞き取り調査の結果としては、天候に左右されない乳製品、食材に困らない上に幹線道路に恵まれた自動車の便の良さが挙げられ（乳製品販売業者）、野菜が富士市など近隣地区より豊富かつ自然が多い、駅前がもう少しにぎやかになればよいというおおむね好意的な意見がでた（中高年買物

客)。他方で公共交通機関の便が悪いため病院に良い医者が来ず廃止してしまった科もある上に、働きながらの子育ては大変であり0～2歳児の保育園が少なく待機児童が問題となっており、預けられない人は育休を伸ばすか、遠い所へ預けなければならないという子育て世代からの問題も指摘されている(乳製品販売業)。

高校生へのアンケート結果と分析:【好き】 = 【住み続けたい】ではない

さらに高校生へのアンケート調査を市役所と共同で2016年11月-12月にかけ市内の5高校にて行った。富士宮について「大好き・好き」と回答する割合は全体で7割超、しかし「住みたい」とする回答は全体の3割程度と逆転している。理由については「市外で生活してみたい」「仕事」「進学」がもっとも多く、愛着が無い・嫌いだから転出したいわけではない。さらに「好き=住みたい」に直結しているかどうか相関関係を調べたところ、各高校で差が見られた。相関係数を見ると(1に近いほど相関関係強い)「住みたいか」での質問で「全く当てはまらない」が最も多かった富岳館では約0.6と高い相関が見られたのに対し、「嫌い・大嫌い」が皆無であった北高校では約0.2と格差が見られた。

地域の高校生は富士宮市に愛着をもっている。が、そのことが定住志向の強まりに繋がらず、むしろ愛着がある方が市外への進学・就職を考えている。単純に「好き=住み続けたい」という図式が成立しないことに注目すべきであろう。

富士宮が好きか	富士宮に住みたいか							好き=住みたい、か?								
	西	星陵	北	富岳館	東	合計	西	星陵	北	富岳館	東	合計	n	高校	相関係数	
大好き	14	4	6	9	6	39	非常に当てはまる	1	4	2	6	7	20	35	富岳館	0.596734
好き	40	28	28	13	20	129	当てはまる	19	12	6	6	10	53	32	東	0.546848
どちらでもない	10	16	11	10	6	53	どちらでもない	27	19	27	8	11	92	66	西	0.434402
嫌い	2	2	0	2	0	6	当てはまらない	13	6	10	3	3	35	51	星陵	0.393705
大嫌い	0	0	0	1	0	1	全く当てはまらない	6	10	1	12	1	30	46	北	0.223012
													230	全体	0.423473	

図表 1 高校生へのアンケート結果

聞き取り調査、高校生アンケートなどを勘案しつつ、20～30代にかけての「現役世代」へのシティプロモーションを以下のとおり提言することとした。

5. 地域への提言:「官能性」をもたらす Creativity and "Empathy"がカギを握る

シティプロモーションを進める上で、我々はまずは二点を明白にすることが必要だと考えた。一つ目はポジショニング設定、そして二つ目は「若者」の明確化である。前者のポジショニング設定については、「誰に向けるアピールか」に応じて提示するストーリーの内容自体が変わってくる。そのため、ポジショニング設定は最も重要だと考える。次に、後者「若者」のターゲットを絞り込む必要がある。漠然と「若者」と言っても、それぞれが持つ背景は異なり、家庭環境や経済力、そして学力などの違いを考慮しなければ、共感するストーリーを提示することはできない。都会へ進学する若者、都会からやってくる若者、地元に定着し続ける若者など多様な志向が指摘されており、これを一緒に考えるのは危険である(原田曜平[2010]ほか)。そのため、シティプロモーションにあたり、具体的ターゲットを絞り、それぞれが抱える背景に沿ったストーリーを作ることが、最も共感を生む手立てである。

非都市的要因		都市的要因	
市場全体	地理化 セレブリティ・成功者の集積 (恵井沢)	コストリーダーシップ 補助金・物価抑制のコスト/第一主義者 (奥津賀地区自治体?)	
一部セグメント	差別化焦点化 クリエイティブな職人タイプ (富士宮)	コストリーダーシップ焦点化 都会に攻撃・消耗したニートビアン (仲間?)	

図表 2 マイケル・ポーターの分類による富士宮市の戦略ポジショニング

そこで我々はこの考え方と富士宮市民の声を踏まえ、図表3のとおり「クリエイティブな職人タイ

プ」にターゲットを絞ることを提案する。今回の調査で各自がニッチ産業で富士宮に魅力を見出し、差別化を図っていることが分かった。加えて「他とは違うこと」で手に職をつけ、自分たちの生活に誇りを持っているように感じられた。従って我々は、その後継者予備軍となる「若者」を呼び込むために、「他者とは異なる生活をしたい人や新生活を送りたい」人が共感するようなストーリーをプロモーションの中心に据えることを提案する。

具体例としては、ターゲットを「都会の喧騒を離れ新しい生活を送りたい若者」に絞り「安らぎ+自らの知識・スキルを発揮できる場所」とする。彼らが共感する「第二の生活」は、「農家・職人としての日々」のストーリーとして提示できる。富士宮には移住者に対してオープンな環境、幅広い年齢層の人との出会いが溢れている。新鮮な野菜を届けるためのネット販売や、テクノロジーを利用した栽培方法の活用など、IT 分野を用いて農業の効率化を図ったり、社会人経験の中で得た知識を基に、今後の農業の発展に貢献したりすることもできる。このように共感できるストーリーを「都会の喧騒を離れ新しい生活を送りたい若者」に向けて発信することが肝要であろう。

以上のように、「クリエイティブな職人タイプ」は、ありふれた事や物に新しい「気づき」を見出すことに長けている。移住者は富士宮に高賃金の仕事を目指して移住するとは限らない。従って富士宮の魅力を一方的に市役所等が提示するのではなく、クリエイティブに生きる移住者に魅力を引き出してもらうことが必要だ。限られた選択肢の中の決まりきった生活ではなく、選択の幅が広いことは「寛容性のある富士宮」ならではのアピールポイントである。つまり、その点を生かして富士宮のプロモーション活動においては、いかに共感できるストーリーを多く提示できるかが重要となるのではないかだろうか。よって私たちは、富士宮における多角的な共感できるストーリーの提案を重視していくべきだと考える。

6. 地域からの評価

市役所担当者からの評価は以下のとおり：

- ・これまで市役所としては若者の流出を課題としてきた。しかしその前段階にある高校生への調査は未だかつて行ってこなかった。市役所としてもこのアンケート結果を分析し、今後の政策立案に活かしていきたい。
- ・何を誰にプロモーションすべきか、今後の課題として施策に活かしていきたい。「志ある人」の移住が活発化していることには注目したい。

参考文献

- ・楠木建[2010]『ストーリーとしての競争戦略』東洋経済新報社
- ・忽那憲治・山田幸三編著[2016]『地域創生イノベーション』中央経済社
- ・アナリー・サクセニアン[2006]『最新経済地理学』日経BP社
- ・島原万丈・Homes 総研[2016]『本当に住んで幸せな街～全国「官能都市」ランキング～』光文社新書
- ・高松平蔵[2016]『ドイツの地方都市はなぜクリエイティブなのか』学芸出版社
- ・原田曜平[2010]『近頃の若者はなぜダメなのか 携帯世代と「新村社会」』光文社新書
- ・マイケル・ピオリ=チャールズ・セーブル[1993]『第二の産業分水嶺』筑摩書店
- ・リチャード・フロリダ[2007]『クリエイティブクラスの世紀』ダイヤモンド社
- ・マイケル・ポーター[1995]『競争の戦略』ダイヤモンド社

島田市の観光資源を活用した着地型観光商品の開発と効果的な情報発信の手法の研究

静岡福祉大学・社会福祉学部・西尾 ゼミ

指導教員：西尾 敏史

参加学生：尾崎汐莉、望月敬介、栗田かすみ、森加津美、
高村優奈、湯田彩乃、松本紗也佳、柴田萌、奥山祐平、
澤木理紗、柴田帝学、芹澤秀和、増田光佑、村瀬比呂

1 要約

観光は「総合産業」であり、「地域を豊かにするための手段である」という認識から、学生の視点から島田地域観光の魅力の再発見に取り組んだ。それは縦に流れる大動脈としての大井川流域であり、東海道の歴史が横糸になって交差し交錯する時空間である。その魅力を再発見し、広く発信するための方法として、「フリーパス」と「古民家カフェ」という手法の提案につなげた。

2 研究の目的

観光資源の豊富な島田市において、エコ・文化・産業・遺跡・食などを地元の人の知恵と工夫で体验し深く知るための着地型観光についてのアイディアをだし、インバウンド効果のさらなる発展に資する。大学が近くにあり、在住ゼミ学生もおり、多様性がある学生たちの福祉や情報分析の学びを活かし、島田の地域社会や観光にかかる諸団体との協働により情報発信の手法を研究し、提案する。

3 研究の内容

調査研究の視点は、地元の人でも当たり前で普段は意識していない地域の魅力を再発見することにより、観光客の滞在や消費につなげるだけでなく、地元の良さを見直し、アイデンティティの形成につなげることである。そのため、伝統文化（工芸など）、酒（酒蔵所）、SL、お茶、食、戦争遺跡（平和教育のため）などに焦点をあて、古民家を改修した宿泊施設（ゲストハウス）や体験交流拠点をつくるなど、物語を提示できることを目標とする。

方法としては、島田市におけるフィールドワーク、島田市の特産品を生かした料理の献立をつくり、それを学生と食べながら交流するなど、地域の方、事業者の方がたとのワークショップを行うなかで、島田市の固有のバナキューな価値を見出していく。

4 研究の成果

(1) 当初の計画～(2) 実際の内容（ほぼ予定どおり）

a. 島田市観光課との勉強会 11月15日（火）

学生が抱いていた疑問・質問を事前に投げかけ、島田市観光課の職員の方がたからお話を伺った。

以下、勉強会を通して刺激を受けた学生の発想とその後の展開である。

島田市は自分たちの市をどうPRしているか。現在「大井川で逢いましょう」冊子・facebook・島田市ホームページ・国内・国外観光展示展・旅行会社への営業などetc...

勉強会で学んだことを受けて、twitter企画をはじめ学生の目線で島田をアピールし写真を見てもらうことで足を運んでもらえるよう企画を始めた。幅広い年代がtwitterをやっていて簡単に検索でき自分でも呟くことができ、いつでも見てもらえると思い行っている。島田の観光スポット・イベントなども市のホームページで発信すると同時にtwitterでも行けば見る人が増え集客につながると考えた。

島田の特産品がお茶・バラ・木材・小饅頭などがありそれらがどこで作られ売られているかが一目でわかるようなマップ制作を行っていこうと考えている。多くのパンフレットがあるが「字が多い」・「読

みづらい」など年齢によって感じるのはさまざまな時に私たちが誰もがわかり・見やすいマップ制作を行おうと考えた。対象者は「すべてのひと」。マップと一緒に大井川で逢いましょうについている割引券なども同封すれば親子連れ・ご年配のかたすべての人が楽しみに島田に来てくれると考える。

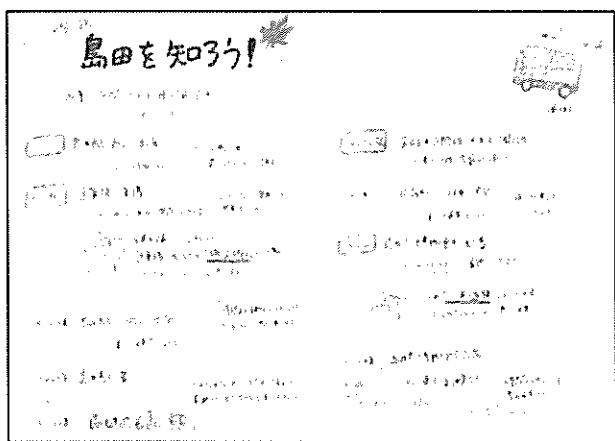
大井川鉄道で走るSL。きかんしゃトーマスも時間が合えば見ることができるかもしれない。SLの魅力について実際乗っている人に調査したところ古い車体・古い駅舎・SLからの自然豊かな風景・ロケ地で使用されたからなど多くの意見があった。電車男のように普通電車が好きな人もいればSLが好きな人もいる。

b. 島田市観光フィールドワーク

①島田方面（蓬莱橋・島田市博物館・川越遺跡）11月27日（日）

②川根・金谷方面（川根温泉、吊り橋、御茶屋、SL新金谷駅）12月10日（土）

私たちは11月から12月にかけて島田で2回のフィールドワークを行いました。



あり景色がとても綺麗でした。しかし、多くの観光客は橋を渡り終えたらそのまま引き返してしまい、その先に行く人はほとんどいませんでした。また、蓬莱橋を渡るだけでもとても長いのでかなり体力を使い疲れてしまいます。そのため、私たちは蓬莱橋を渡った先にお土産やお茶屋、カフェがあれば休むことができ、島田産の物を売ることで渡った後の楽しみもできるのではと考えました。



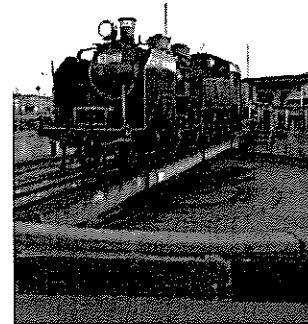
んでくれるのではないかという意見が出ました。

1回目は、11月27日に島田駅周辺を回りました。蓬莱橋では、ボランティアガイドの方から蓬莱橋の歴史についてお話を聴きました。蓬莱橋は、昔は今ほど丈夫ではなく大井川の増水の度に被害を受けていたことや、橋を渡った先にある茶園を管理するために今でも農道として利用されていること等お話を通して学びました。橋を実際に渡り、その先の茶畠まで足を運びました。渡った先は閑散としており、その先は鐘や一面に広がる茶畠が



午後は、島田博物館と旧東海道川越遺跡に行きました。ここでもボランティアガイドさんに案内してもらい、川越の文化や島田醤などについてご説明いただきました。木造の番屋が今でも残っており、主に展示がしてありました。遺跡があるところが駅からバスに乗った先にあるので、古民家が残っているのを活かして古民家カフェをすれば観光客も足を運んでくれるのではないかという意見が出ました。

2回目は、12月10日に車を利用して川根方面と金谷方面を回りました。川根温泉笹間渡に行き、道の駅に訪れている観光客や笹間渡駅にあるカフェでお話を聴きました。塩郷の吊橋を渡り、その後には旧東海道金谷石畳に行きました。実際に石畳を歩いてみましたが、石がゴロゴロしており、上るのはすごく大変でした。石畳のすぐ横にはカフェがあり、島田産のお菓子を販売しており、休憩するのにもただカフェを楽しみにくるのにもとても良いと感じました。その後は、新金谷駅でSLを見ました。新金谷駅にある転車台はハイブリッド式のもので回転させる姿は鉄道ファンにとっても家族連れにとっても迫力のあるものでした。ロコミュージアムでは、SLが展示してあり記念写真を撮ることや実際に乗ってみることもでき、子どもだけでなく私たちも楽しめました。SLは期間限定でトーマスになるので、子どもには大人気だと思いました。SLは島田の魅力の一つでもあるので、それを活かしてSLと地域の食堂でコラボレーションしてSL食堂を作れば話題性もあり、より多くの人が訪れるのではないかと考えました。



2回のフィールドワークを通して、島田にある社会資源をたくさん知れることができたので、それらを活かし地元の人や店と協力してより多くの観光客が島田の魅力を知り訪れてもらえるような着地型観光商品の開発を進めていこうと考えました。

c. 学生が案内する島田市着地型観光ミステリーツアー 2月9日（木） 参加者18人 案内学生7人

静岡福祉大学公開講座の一環として、学生が案内する島田着地型観光ミステリーツアーを企画した。島田市の主要な観光スポットである蓬莱橋、島田市博物館、川越街道を中心に観光地をたずねる。案内ガイドの学生は、フィールドワークで体験した観光地の魅力を、今度は参加者に伝え、歴史を含めた由来などを調べて伝える必要があり、大きな学びにつながることになった。

昼食には、島田ならではの食材を生かした地産地消のランチの時間を設け、また、散策の後に、カフェでの休憩・おしゃべりの時間をとり、参加者からの感想を聞きながら、その知見を着地型（滞在型）の観光メニュー開発の提案に活かしていく予定である。

(3) 実績・成果と課題

観光は「総合産業」であり、「地域を豊かにするための手段である」という認識を強くし、フィールドワークやミステリーツアーの取り組みから、学生の視点から島田地域観光の魅力の再発見に取り組むことができた。それは縦に流れる大動脈としての大井川流域であり、東海道の歴史が横糸になって交差し交錯する時空間の発見である。その魅力を再発見し、広く発信するための方法として、「フリーパス」と「古民家カフェ」という手法の提案につなげた。課題はこうした提案の具体化である。

(4) 今後の改善点や対策

より具体化していくために、観光課、観光協会、地域の関係団体、市民、観光客とのコミュニケーションやかかわりをもっと増やしていく必要があった。期間が短かったこともあるが、この地域体験学習、研究をきっかけとして、学生として具体化できることが考えていく必要がある。

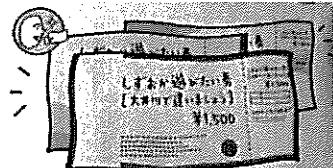
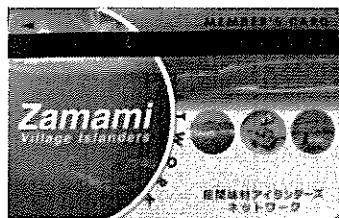
5 地域への提言

地域（島田市観光課）への提言は、意見交換会の中で、それまでの取り組みの中から学生が感じた発送やアイディアなどをやりとりしたが、焦点化した手法として、つぎの「島田観光フリーパス」と「古民家をイノベーションした観光の拠点化」を提案させていただくこととした。

フリーパス

フリーパスがあると色々割引がついてきます。例：○○店100円割引などちょっとした割引がついたり、デザートがついたりお得が沢山！ですがなかなかそのフリーパスの存在に気が付く人が少なかつたり、知らない人が多いことが分かりました。そこで、もっと多くの人に知ってもらうためにもっと広告で宣伝したり、CMを流したりすれば良いと思います。またお店とかにも置いておいて宣伝するのもいいと思います。地域復興にも効果があると思います（観光客にも効果があるかも）。だからもっとフリーパスを増やすべきだと思います。そしてフリーパスの期限を春夏秋冬全部に対応していればその季節にしかできないことを体験できる機会があるからです。短い期間より長い期間の方がよりいっそうお客様が増える気がします。

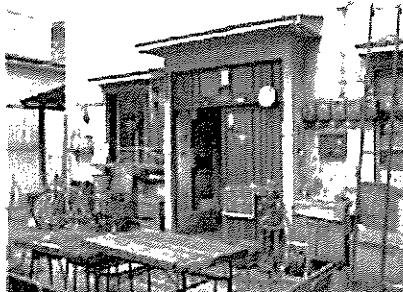
例えば、これは（右）「座間味村アイランダーズネットワーク」の会員カード。沖縄のケラマ諸島の座間味村の美しい自然を愛し、ファンになつたメンバーに、より深く知つてもらい、より便利に楽しんでもらうもので、実際に島を訪れたときは特典を利用して、一步踏み込んだ座間味村を味わうことができます。



例えば、これは（左）2016年2月に企画実施された「大井川の遊び体験50%オフ」の遊びたい券。割引のお得感は若者のみならず、あらゆる世代の関心を惹きつける体験のきっかけになるはずです。

古民家カフェ

島田着地型観光のアイディアの提案の一つは、「古民家カフェ」です。島田市の蓬莱橋と島田宿大井川川越遺跡と二回フィールドワークを行つた結果、一つ目の意見として、蓬莱橋を渡つただけでは歩きながら景色を見て終わりなので渡つた先にお茶屋、カフェを作つて島田の和菓子が提供できれば渡つて疲れた時に島田の景色を見ながら休憩できるのではないかと考えました。二つ目に島田宿大井川川越遺跡では、江戸時代の旧東海道、大井川の東岸の道筋や空き家になっている建物が昔のままで残っています。昔の雰囲気をこのまま利用してカフェ、ゲストハウスを作れば歴史的な空気が味わえることやレトロな感じが高齢者から若者までの憩いの場となり他の町からきた人と住民のコミュニケーションの機会が増え、暮らしたいと思うのではないかと考えました。また、そこで島田の特産品を活かしたオリジナルのメニューやSLが有名なのでSLをモチーフにした商品を提供すればそれを食べた若者がツイッターといったSNSで友達に情報提供していくけば島田の住民では気づかない魅力が拡散されて、より多くの人に島田の魅力が発見できるし、NPO法人といったサポートネットワーク体制が充実すれば島田で暮らしたい人が安心して暮らしていくのではないかと思います。



6 地域からの評価

蓬莱橋の番小屋周辺では、国土交通省指定の「ミズベリング」という開発プロジェクトが予定されており、提案の趣旨を盛り込むことが可能。また、島田市だけでなく静岡空港周辺の市町が連携して観光の体験プログラムを収集し、今後どのように発信していくか検討を行つてるので、フリーパスなどのアイディアを取り入れていくことが可能との対応をいただいている。

(別紙) 成果報告書

若い世代の就職や結婚にかかる意識調査・分析と提言

静岡県立大学 経営情報学部藤本ゼミ

指導教員：教授 藤本健太郎

参加学生：福室茉生、杉山ひかる、山中あかり、

酒井七菜子、西澤優、藤田晃史、勢村頤騰、中野史哉

1要約

富士市に若者を呼び込むにはどうしたら良いか提言するため、まず若い世代が人生設計に関してどのような意識を持っているのか、平成28年10月に静岡県立大学経営情報学部の学生104名にアンケートを実施した。アンケート結果及び富士市役所への調査訪問の結果から、富士市に若者を呼び込むには政策の改善だけではなく、市のPR方法を見直した方が良いという方向で提言を行う。

2研究の目的

現在、日本全国のほとんどの市町村が直面している人口減少。中でも若い世代の減少・流出を止めるることは大きな課題の一つである。富士市はまだ深刻な人口減少に至っていないが、県単位では社会減が問題になっているため、将来を見据えた対策が必要だ。そこで、就職や結婚（特に結婚や出産など）に関するアンケートを行い、その結果から富士市において若者の人口を増やすにはどうしたらいいかを若者目線で提言を行う。

3研究の内容

静岡県立大学の学生に人生設計に関する意識調査のアンケートを行い、その分析をする。その結果から、若者が求める政策・支援事業をいくつか考える。富士市役所への調査訪問をし、提言の方向性を固め、ディスカッションを重ねてまとめていく。

4研究の成果

(1) 当初の計画

10月上旬：アンケート用紙作成

10月中旬：アンケート実施・集計

11月：アンケート結果の分析・政策の改善点や新規事業の提案などの相談

12月：富士市役所への調査訪問・提言の完成

(2) 実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

アンケート用紙の作成と、アンケートの実施・集計は予定通り完了したが、学生メンバー同士の予定が合わず、アンケートの分析やそこから考えられる政策はなにかなどの相談回数は当初の計画よりも少なくなってしまった。

富士市役所への調査訪問は平成28年12月12日に行うことができた。アンケートを行った段階では、大学生目線での政策立案をしようと考えていたが、富士市役所への調査訪問を経て提言の方向を変えた（詳細は次項に記載）ため、1月にまとめることになった。

(3) 実績・成果と課題

静岡県立大学経営情報学部生104名に行ったアンケート結果からわかったことが4点あった。

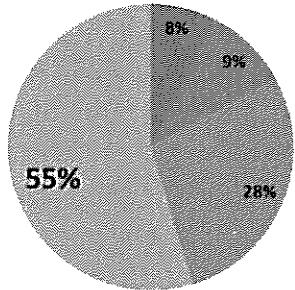
① 地元で就職・地元付近で就職する人が約8割

	静岡県出身者	静岡県外出身者	出身地不明	計	割合	静岡県出身者 の中での割合	静岡県外出身者 の中での割合
静岡県内	58	6	1	65	62.50%	80.56%	20.00%
静岡県外	12	24	0	36	34.62%	16.67%	80.00%
未回答	2	0	1	3	2.88%	2.78%	0.00%
計	72	30	2	104	100.00%	100.00%	100.00%

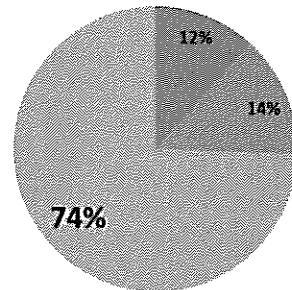
② 就職先に求める上位に挙がったものは「給与」「仕事内容」「福利厚生」

③ 結婚したいと思っている人は全体の8割以上

結婚願望(男性)

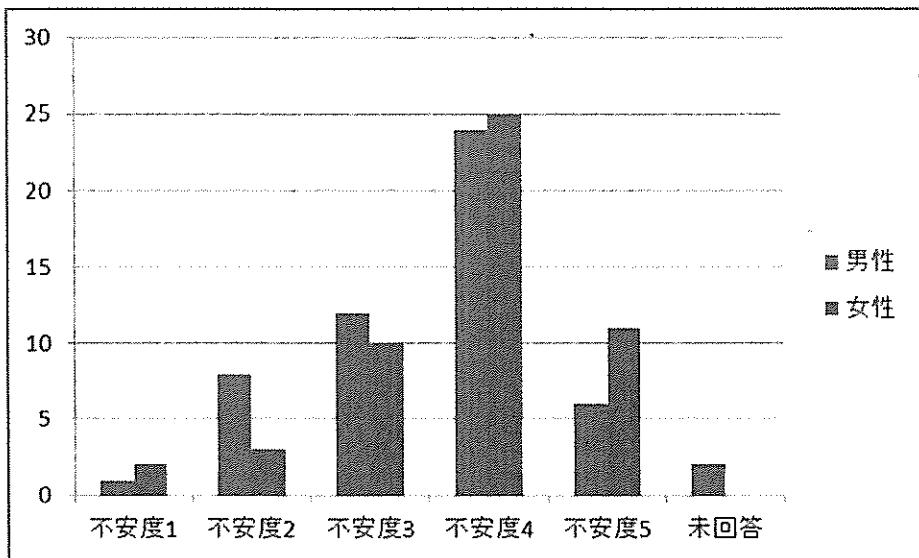


結婚願望(女性)



④ 子どもを欲しいと考えている人が多いが、子育てへの不安度も大きい

列1	子育て可能だと思う人数		理想の子供の人数	
	子育て可能だと 思う人数(男性)	子育て可能だと 思う人数(女性)	理想の子供の 人数(男性)	理想の子供の 人数(女性)
0人	1			
1人	4	8		6
2人	34	33	40	32
3人	7	6	7	10
4人	1			
子どもはいらない	4	2	5	1
未回答	2	2	1	2
計	53	51	53	51



不安要素

経済力（養育費）/全くの未経験（子育ての仕方がわからない）/
仕事・家事との両立等

富士市役所への訪問調査より

- ① 富士市で行っている就職・子育て支援事業は複数あったが我々学生が知っているものはなかった。
- ② 富士市の街・富士市役所の外観も良く、雰囲気も良かった。

(4) 今後の改善点や対策

アンケートでの質問の仕方や、解答欄に工夫が必要である。
学生メンバー間での日程調整を早めに行うべきだった。

5地域への提言

アンケート集計・分析の段階では、若者を呼び込むために就職や結婚・出産に関する支援事業を充実させが必要だという考えだった。例えば、子育てへの不安要素として「子育ての仕方がわからない」という意見があったから、子育てを経験したベテランの方（主に退職されている高齢者）と現役の子育て世代だけでなく誰もが交流できる会を開くといった支援を考えていた。しかし、富士市役所への訪問調査で、事業を立ち上げても知ってもらわなくては意味がないということを強く思い、若者（主に大学生）に届くPRの方法を提案することに決定した。具体的なPR方法としては①SNS・ゆるキャラの有効活用②ドラマや映画の舞台にする考えられる。最終的には2月中を目途に富士市に対して提言を行う。

6地域からの評価

12月に行った富士市訪問調査時に、アンケートの結果および分析に対して興味深いと いう評価を富士市のスタッフから得た。

多文化共生社会の実現に向けて～互いの違いを認め合えるまちづくり～

静岡文化芸術大学 文化政策学部 池上ゼミ

指導教員：教授 池上重弘

参加学生：市川沙映子、伊藤優希、関谷理奈、田中琢間、永島有佳子、松浦達也、

松下亜依、山本澪

1. 要約

第3次磐田市多文化共生推進プランに対する中学生および高校生からの意見を聞く機会として中学生や高校生を対象としたワークショップを実施し、若い世代の声を集めた。また、親の移住に伴って日本に来日し、日本で成長した第二世代の増加に伴い、大学への進学や日本社会での就職を希望する者が増えているが、そうした希望を実現させるためのモチベーション支援の一環として、ブラジル人向けのポルトガル語（日本語字幕付き）のフォトストーリー動画を作成した。

2. 研究の目的

磐田市は2016年度、第3次多文化共生推進プランを策定している。多文化共生推進協議会が市民の意見を反映させる場となっているが、同協議会から次代を担う若い世代の意見にも耳を傾けたいとの声が上がり、大学生によるワークショップを開催し、中高生の声を聞くことにした。これが本研究の第一の目的である。

第二の目的は、大学進学を果たしたブラジル人大学生や、市内で安定した職場で就労しているブラジル人の声を届けるフォトストーリー（動画）を作成し、ブラジル人の若者たちはその保護者たちにモチベーションの支援を図ることである。

3. 研究の内容

（1）多文化共生推進プランに関する若い世代のヒアリング

ア) 磐田市立竜洋中学校でのワークショップ

開催日：12月2日、9日（両日ともに金曜日）

時間帯：いずれも5時間目、6時間目を通して実施（13：35～15：25）

対象：3年3組の生徒（34名）+特別支援学級の生徒（2名）

内容

1日目は、まず中学生に静岡文化芸術大学がどんな大学か知つてもらうために簡単な大学の紹介をした。さらにレクリエーション（自己紹介ゲーム）によって 大学生と中学生の相互の親睦を深めて大学生を身近に感じ取ってもらった。中学生にとって馴染みがない「多文化共生」というワードの意味を説明した後に、クイズ形式で磐田市に関する多文化共生を学んでもらった。後半では、浜松国際交流協会（HICE）が開催したグローバルフェアで

のブラジル人大学生のプレゼン動画を観て、個人でワークシートに感想を書いてもらったあとにグループに分かれて感想や意見を共有した。

2日目は、動画のおさらいをし、外国人が日本で暮らすときに感じる壁について説明した。それを踏まえて自分自身が外国人にならうどうなるか実感するために、「自分が韓国で中学生をやることになったら」と想定して困ることや、期待することや、あつたらうれしい支援についてグループで議論した。後半では今までの活動を踏まえて磐田市で暮らす外国人がより暮らしやすく、活躍でき、日本人市民と親密な関係を築いていくためにどんなことが必要かを前提に、磐田市第3次多文化共生推進プランの概要と現状の課題を説明し、グループごとに環境づくり・地域づくり・人づくりの3つに担当を割り振って、新たなプランを考案し全体で発表した。

結果

自己紹介を交えたレクリエーションで中学生との距離が縮まったことで、多文化共生のクイズやその後の活動も円滑に進んだ。

ブラジル人学生のプレゼン動画視聴では、印象の変化に関しては日本語を必死に学ぶ姿や、勉強を人一倍頑張る姿に感動する意見が多かった。日本の学校のどの点が大変だったかという項目では、日本の文化に触れることや、「外国人」であるがゆえに感じた周囲との差について大変だと思う生徒が多くいた。動画を通して伝えたいことは何かという問いには、努力を続ければ夢や目標は叶えられること、自分にしかできないことを率先して行うといった、前向きになることの大切さを感じ取る生徒が多くいた。

「自分が韓国で中学生をやることになったら」というグループワークでは、韓国で暮らすうえで直面する様々な問題について考えた。都市部には多言語表記が普及しているが、学校教育や韓国人と会話するときに韓国語が話せないと困るという意見が多かった。あつたらうれしい支援では学校で翻訳してくれる先生が必要という意見や、日本の物資を扱うお店がほしいという意見が多かった。

磐田市第3次多文化共生推進プランについては、中学生同士のディスカッションを中心に外国人のことを考えてプランを作ってくれた。中学生独自の視点で、外国人市民が活躍できるイベントや、磐田での暮らしに必要な講座や、日本人市民と繋がりを作るきっかけを考えてくれた。

イ) 静岡県立磐田北高等学校でのワークショップ

開催日：1月19日(木曜日)

時間帯：15:45～18:30

対象普通科2年生8名

内容

活動内容は竜洋中学校で行ったものとほぼ同じだが、2回分のワークショップを1回に凝

縮した。参加した生徒の多くは静岡文化芸術大学に進学を希望しているので、大学の学びの紹介と大学生と進路に関して話をする時間を設けた。それ以降は中学校同様ブラジル人学生の動画を視聴し感想の共有、韓国で暮らすことを想定したディスカッションを行ったのち、磐田市第3次多文化共生推進プランについて考えてもらうという流れである。

結果

竜洋中学校のワークショップと異なるのはグループワークのやり方である。中学校では生徒たちがディスカッションし、大学生はローテーションで見回っていたが、磐田北高校のワークショップでは、初めから大学生をグループに交えてディスカッションを行なった。こうすることで、生徒一人ひとりの意見を聞くことができ、さらに掘り下げた討論が可能になった。

ブラジル人学生のプレゼン動画視聴では、印象の変化の点では日本に慣れようとする姿に好印象を抱いたり、辛いことを自分が頑張る糧にする姿に感動したり、助けてあげたい、理解してあげたいという意見のほかに、外国人学生を受け入れる側の環境が整っていない問題に触れる生徒もいた。日本の学校のどの点が大変だったかという項目では、言葉の問題や、外国人だから日本人と同じ扱いをしてくれないことに関する意見が多くあった。動画を通して伝えたいことは何かという問には、同じ境遇である人に対する励みや、自分がどこから始まろうと、外国人だろうとも日本で暮らしていくことができる点を感じ取る生徒もいた。

「自分が韓国で暮らすことになったら」というグループワークでは、言語やマナーの理解が難しいという意見がある一方で、自分が韓国語を身に着け韓国人の友達を作ることができるという意見や、自分自身が韓国と日本をつなぐ友好の架け橋になりたいといった前向きな意見もあった。

磐田市第3次多文化共生推進プランについては、大学生と高校生と一緒にプランを考えることができた。今までの活動を踏まえて、外国人市民について理解を深めるフォーラムや、町おこしの一環で外国人の参加を呼びかけるイベントや、普段の暮らしの中で外国人にとってあると便利なものを考えてくれた。

(2) 外国人の若者のフォトストーリー作成

静岡文化芸術大学で学ぶ定住ブラジル人学生3名と磐田市内で働く定住ブラジル人がポルトガル語でメッセージを伝えるフォトストーリーを作成した。さらに日本語訳した文章を字幕として付けて、ブラジル人にも日本人にも内容がわかるようにした。その動画をDVDに焼き付けて磐田市と磐田市教育委員会に提供し、今後広く活用してもらうようにした。

4. 研究の成果

生徒たちの意見は2017年1月30日(日)に磐田市内で開催された「いわたインターナ

ショナルフォーラム 2017」で公表された。具体的にはゼミ指導教員の池上が「磐田市における多文化共生の現状と第 3 次プラン～未来を担う若者たちの声を聞きながら～」と題した講演の中で紹介した。今後はゼミ生のまとめた報告書をもとに、生徒たち自ら考えてくれた意見を磐田市多文化共生社会推進協議会（会長：池上重弘）に報告し、プラン策定の最終段階で実際に反映されることを期待している。

5. 地域への提言

具体的提言としては、以下のような施策展開のアイディアを引き出すことができた。

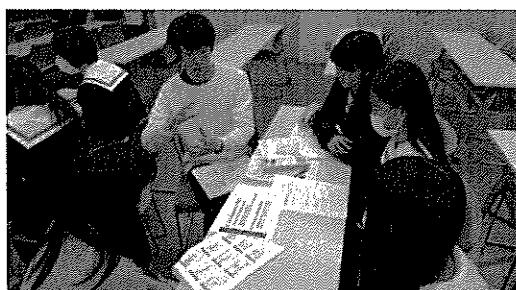
- 1 環境づくり：①安心プラン、②学校に通訳、避難場所の多言語表示、絵で表示
- 2 地域づくり：③文化交流、④スポーツ交流、⑤大試食会、⑥ホームパーティ
- 3 人づくり：⑦日本語スピーチコンテスト、⑧多文化共生促進フォーラム等

6. 地域からの評価

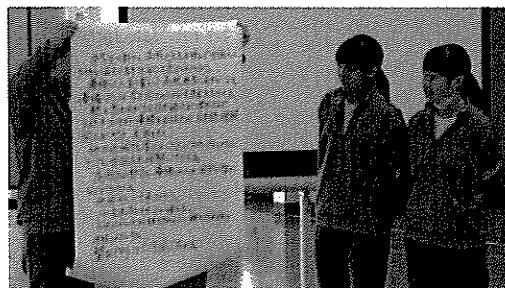
磐田市の担当者からは、実際に多文化共生施策に反映できるアイディアをもらい、感動したとの声をいただいた。また、竜洋中学校の担任の先生からは、「あれだけのプランを生徒たちが考えることができたことに驚きました」との感想をいただいた。



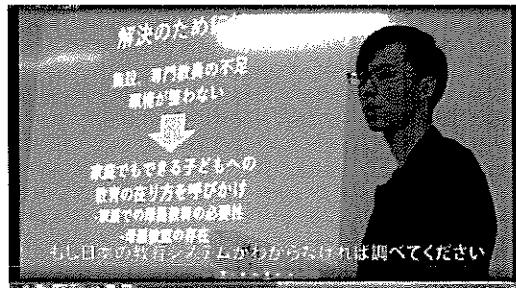
竜洋中でのワークショップ



磐田北高でのワークショップ



竜洋中でのワークショップ



定住ブラジル人学生のフォトストーリー